

---

# 憧れの彼

今村架純

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

憧れの彼

### 【Nコード】

N1133A

### 【作者名】

今村架純

### 【あらすじ】

主人公の実架<sup>みか</sup>は恋をした。その相手は生徒会長。しかし、会長の気になっている人は、美人の生徒会副会長の春奈<sup>はるな</sup>先輩。果たして、実架は両思いになることができるのか？

## 第一章『あなたが好き』

私は恋がしたい

だからと言つて、誰でも良い訳じゃない。

私のことだけを見てくれて、私のことだけを愛してくれる

そんな人はいないって思うでしょ？

私もいないって思ってた。

誰もが 恋をして傷ついても、また再び恋をする。

でも、私は一生の内で愛するのは一人だけで良い、って思ってる。

そんな私の前に彼が現れた

まさに理想の男の子。彼の名は、ながせ・れん長瀬蓮。

彼と両思いになれたら良いな？

私は<sup>ほしの・みか</sup>星野実架。

勉強も体育も同じぐらいできる、平凡な高校生。

彼女いない暦、16年。自分で言つてて、むなしくなる。

「実架、会長のあいさつだよ」

私に話しかけてきたのは、親友の綾乃。あやの

いつも明るくて、クラスの中心的存在。

背が高くて、とっても美人な彼女は結構もてる。

「明日から体育祭の練習を行うことになるだろう。」

真剣に取り組み、みんなで協力して頑張りましょう」

朝会の壇上で話をしている彼は、生徒会長の長瀬蓮。

彼はクールでポーカーフェイス。

運動も出来るし、成績は常に学年トップ。

女子なら誰でも憧れている存在だ。

そして私も会長を見るたびに、心臓の鼓動が高くなる。

美沙に教えてもらった。この気持ちが恋だと。

ただど会長は誰に対しても、笑顔を見せたりはしない。

初対面の相手にはきつと、会長が冷たい人だと勘違いしてしまうだろう。

でも、私は会長が優しいことを知っている。

会長に初めて会ったのは、4月6日。

この高校の始業式の日だ。

初めてこの学校に来た私は、体育館の場所が分からなかった。

「やばい！！後、5分で始まっちゃう」

時間との戦いで慌てていた私は、階段を踏み外して落ちてしまった。

「痛いっ……」

泣きが入るほどの痛みだった。

立とうとすると、よろけてしまった。

どうやら、足をくじいてしまったようだ。

「大丈夫か？」

声のした方を見ると、男子生徒が立っていた。

「は、はい……」

初めての学校なので緊張していた私は、おもわず大声で返事してしまった。

「新入生だな。ほら、体育館に行くぞ」

彼は私の手をとって立たせてくれた。

それから私は足の痛みを我慢しながら、彼の後ろをついて行った。会話もなしに、彼はささと歩いて行く。

校舎を抜けると、体育館に着いた。

「あ、あの　どうもありがとうございます」

「いえ、別に」

彼はどこかそっけない。

「私は星野実架です。貴方は？」

「俺は早瀬蓮。生徒会長をやっている」

この人が生徒会長だなんて……。びっくりだ。

「生徒会長だったんですかぁー」

「意外かつ？」

会長は笑いもせず、そう尋ねてきた。

「い、いえ。そう言う意味じゃなくて

この学校に来て、一番最初にあったのが生徒会長。

そう思うとなんか、びっくりです！！」

私が言うと、会長は不思議そうな顔をした。

私はいつたい、何を言ってるのだろう…（汗

「おまえ、面白い奴だな」

そう言った会長は笑っていた。

その笑顔に私は惚れてしまったのかもしれない。

とにかく、会長が好きになったのは始業式の日からだ。  
たった数分でも私にとっては忘れられない日となった。

私はあくびをしながら、バスが来るのを待っていた。

明日から体育祭の練習が始まる。

私はリレーの選手に選ばれていた。

本番はきつと、緊張するだろう…。

「はあ」

思わずため息を付いた。朝練もあるし、今日は早く寝よう。  
最近会長のことを考えてばかりで、夜も眠れない。

乙女の悩みと言う奴だ。

「ため息なんかついて、おまえらしくもない」

「えっ…」

声の主は憧れの会長だった。

「いつから隣に居たんですか？」

「いや、今来たところ。」

バス停で会長と会えるなんてラッキー。神様に感謝だ。

「なんか、悩みでもあるのか？」

「別に悩みなんてありませんよー」

「そう、なら良いけど」

「もしかして、心配してくれてるんですか？」

私はちよつと期待しながら、尋ねた。

「別に。でも、おまえが暗いと俺まで暗くなる」

これはどういう意味だろう？

もしかして告白！？そんなこと、あるわけないか

「いや 恋の悩みですよ」

「…おまえにも好きな奴いるのか？」

そりゃ、そうだよ。私にだって好きな人ぐらい

でも、本人はまったく気づいて無いんだよね。

「蓮会長だって好きな人ぐらい居るでしょ？」

「さあ？居るかもしれないし、いないかもしれない」

なんだよ 勇気を振り絞って聞いたのに…

はつきり、してよ！！

「どっちですか？」

好きな人を聞くチャンスだ。でも、聞くのが怖い。

「自分でも分かん。気になる奴はいるけど、好きな奴かは分からない」

「誰？」

私はそう尋ねた。

気になるってことは もう好きってことだよ、会長。

貴方も恋をしてるんですね…。

その相手が私だったら良いのに。

私は貴方を一生愛すと誓えるわ

「おまえが言ったら教えてやるよ」

はっ？私が本当のことを言えるわけないでしょ？

まして、蓮会長の前で！！

私にここで告白しろ、って言うの？

無理だよ、少なくとも今の私にはそんな勇気ないし。

「え、えっと クラスの野村隼人」

こつなつたら、適当に言えー！！

のむら・はやし

野村隼人。

彼は顔が良くて明るい、サッカー部のエース。  
隼人とは昔から、喧嘩友達である。

「…そうか。あういう奴が好みなんだな」

「え、好みって言うか」

口ごもる、私。隼人は私の恋愛対象じゃないし。

隼人のことを理想の男子だ　って言っている女子は居るけど、  
私にはただの馬鹿にしか見えない。

「いや、隼人とは昔からのクサレ縁でして」

私ったら何を言っているんだ？馬鹿じゃない。  
まだ秘密にしておいた方が良かったかも……。

「野村は結構、もてるぞ。」

生徒会の奴等でも懂れている女子は居る。

まあ、頑張れ」

応援されても全然、嬉しくないんだけど？

「れ、蓮会長の気になる人は？」

いや　聞きたくない。でも、聞きたい　。

しつかりするんだ、自分！！

「俺は…副会長の竹内春奈」

はあ…。聞くんじゃないかった。

竹内春奈　彼女はしつかり者で女子からも男子からも好かれてい  
る。

何よりも美少女だつ！！

私とは比べたら、『月とスッポン』だし。

神様は私にチャンスを与えてくれる気は無いみたいだ　。  
「おい、どうした？」

ぼつとしている、私に蓮会長は心配そうに尋ねる。

そんな顔しないで。私を見ないで

「わ、私は歩いて帰ります。さようなら」

そう言って、会長の顔を見る余裕もなく走った。

バス停から遠のいていく。

恋をすると、何故こんなにも苦しいの？

会長と両思いになれるなら、どんなことでもする。

会長が一日でも私のことだけを、見てくれたなら死んでも良い。  
そう願うのは罪ですか？

「そっか、春奈先輩か」

綾乃は黙って私の話を聞いてくれた。

綾乃は始めての高校で私に声を掛けてくれた。

不安と緊張の入り混じっていた私に「友達になろう」って言うてくれた。

彼女は私にとっての天使だ。

「うん。聞いたのは良いけど、立ち直れなくてね」

あれから歩いて家に帰って、夕食も食べずに布団に入った。  
眠れずに、泣いた。

何故会長が春奈先輩のことを好き、って言ったぐらいでこんなに苦しいのだろう。

「でも、会長は好きかは分からない！！って言ったんでしょ？  
なら、まだチャンスがあるんじゃない？

春奈先輩はただの憧れの人かもしれないし」

「えっ？」

「元氣出してよ、実架。憧れと好きな人は違うわよ。

憧れの人は 理想の人よ。例えば、金持ちの人と結婚したい。

これは、単なる理想に過ぎないのよ。

でも、実架が会長を好きってのは理想じゃないでしょ？

心から、好きなんでしょう？」

綾乃の言葉で少し元氣が出た気がした。

「心から好きなら、会長を追いかけなきゃ！！」

そして、春奈先輩はただの理想の人だと気づかせてあげなよ」



彼女は笑顔でそう言った。

「…私、頑張ってみるよ。ありがとう」

綾乃、いつも私に勇気と力をくれてありがとう。  
貴方が居なければ、私は暗闇をずっとさ迷ってた。  
大げさかもしれないけど、本当にそう思うんだ。  
それぐらい、会長は大切な人だから。

「おい、実架 会長が呼びだぜ」

昼休み、隼人が私にそう言った。

えー会長が？

「廊下に居るわよ、早く言っておいで」

綾乃は私をせかすように言った。

ただ立ち止まっているだけでは前に進めない。

「行つて来る」

会長は何のようかな？とりあえず、昨日のことを謝らないと。

あんな変な別れ方、会長も気にしてるかもしれない

「よっ、今時間あるか？」

「はい」

会長とならんで歩く。

あゝ背が高いな。私はそんなことを考えていた。

屋上には人もいなくて、話すには絶好の場所だった。

「あの 会長、昨日はすみませんでした」

「俺こそ、ごめんな」

「えっ？」

突然、蓮会長に謝られたので私はびっくりした。

何で、会長が謝るの？別に会長は悪くないよ。

「俺、おまえの気持ちを考えずに」

野村はもてるとか…言った。

おまえはそれで、嫌な思いをしたんだろ？悪かった」

違うし！！私は会長の好きな人を聞いてショックを受けただけ。

そう、ちょっと凹んじやつただけ。

でも私はそんなことじゃ、めげないからね？

蓮会長を好き、って気持ちを持ち続けるのは私の自由でしょう？

「いえ、大丈夫です。」

本当に昨日のことは気にしないで下さい」

「でも…」

「お互い、頑張りましょう」

私は絶対に貴方を振り向かせて見せるから。

覚悟しておいてよ！！

## 第二章『体育祭の練習』

「疲れたー」

この広い校庭を一時間も走り続ければ誰でも疲れるであろう。私は体育祭を優勝するため、必死で練習していた。

リレーの選手に選ばれたからには、ちゃんと練習しなければ。みんなの期待に答えなければ

「実架、頑張ってるな」

幼馴染の隼人が私に声を掛けてきた。

「そりゃあ、優勝目指してるからね」

「そっか、そっか。俺もガンバロー」

私の数倍も隼人は練習して、サッカー部の優勝を目指しているじゃないか。

あんたは少しぐらい休んだ方が良くないのに。

でもそうやって、頑張っている隼人を見るのは好きだ。

幼馴染であることが嬉しく思えてくる。

努力しない人間なんてダメ人間だ

だから、私は体育祭も 恋愛も精一杯頑張ってみせる。

「何見てるの蓮？」

春奈は尋ねた。

蓮はさつき程から窓の外、校庭を見ている。

「体育祭の練習頑張ってるな」

「そうだね。私たちは今年最後だし頑張らないとね」

「ああ」

「あの子 星野実架ちゃんだっけ？」

この一週間、一度も練習をサボらずにやって偉いね」

春奈の言葉に蓮はうなづいた。

翌日

「ねえー、実架。今日ぐらいいは練習休んだ方が良くいよ?」  
綾乃は心配して言った。

私の頭はぼくとしていいる。

さつき熱を測ったら、九十 もあつた。

でもリレーは私一人でも欠ければ、練習にはならない。

「大丈夫だつて」

無理に笑顔をつくる。大丈夫だよ、綾乃。

私は休む暇なんてないんだ。

「…まあ、実架は言い出したなら聞かないから好きにしたら」

「うん、じゃあ行くね」

私はそう言つて、体育館の更衣室に向かう。

階段を下りながら思つた。

もしかしたら、本当にやばいかもしれない。

なんかこの階段が左右に動いているようにみえる。

実際には動いてはいない ということは、私自身がふらふらして  
いるんだ。

「やばい…」

私はそう言つて階段から落ちるのを覚悟した。

そして足が階段から離れた。

あれ ！？ 案外、痛くないな

「おい、大丈夫か？」

聞き覚えのある声に私はびっくりする。

階段を落ちたことに間違いは無かつた。

「えっ？」

私は蓮会長に抱かれていた。

「ええええええ……」

私の頭は混乱していた。

熱が出てただでさえ考えられないのに、この状況ときた。

「俺が階段を上ろうとしたら、おまえがいきなり落ちてきた」

「ご、ごめんなさい」

「怪我は無い？」

私は目を開けているのもつらくなる。  
そして意識を失った。

ここはどこ？何か柔らかい物の上にいる

私が目を開けると、そこは見慣れた私の部屋だった。  
どうやら、ベッドで眠っていたらしい。

熱がまだあるのか、頭がくらくらする。

「待てよ？」

私は考えた。階段から落ちた後：どうしたわけ？  
必死に思い出す。

辿り着いた結論は：蓮会長に助けられたということ。

「嘘っ！！」

これが夢であれば良い。

「お母さん、お母さん！！」

「何よ？」

私の部屋へとお母さんが入ってきた。

「私：どうした？」

「熱がまだあるでしょ、静かにしてなさい。」

実架の彼氏がかついで家まで送ってくれたわよ。

それにしても、貴方馬鹿ねえ！。なんで階段から落ちるの？

熱があるんだったら大人しく家に帰ってくれば良かったのに」

私の彼氏？彼氏？彼氏　？誰それ？

それって、やっぱり会長のことだよな？

「彼氏じゃないし」

「何言ってるの！。普通彼氏じゃなかったら、家まで送ってくれないって。」

保健室に連れて行くだけよ。

それにしても、かつこ良い子だったわ」

実架も年上の良い彼氏をもって お母さんは嬉しいわ」

「黙って、出て行つて!!」

私はパニックだった。

母を部屋の外に無理矢理出すと、頭の中を整理した。

「と、とりあえず会長に電話しよう」

頑張れ、落ち着け。そう言つて、携帯電話を取った。

つて、私は会長の電話番号なんて知らないし……

せめて、メールアドレスだけでも聞いとけば良かった。

今更、後悔してもどうしようもない。

「明日、お礼を言おう……」

そう言つて、私は再び目を閉じた。

『今日一日休めば?』そう母に言われても私は無理に家を出てきた。

昨日練習を休んでしまった分、今日は人一倍頑張ろう。

私はそう思っていた。

そして 会長にお礼を言おう。

家までかついに来てくれたなんて…私、重かつただろうな(汗

そう思いながら、生徒会室に向かった。

「トントン」

ドアをノックすると、春奈先輩が出てきた。

「えっと、蓮会長いますか?」

「今、中庭に行つたわよ」

「あ、ありがとうございます」

春奈先輩は本当に綺麗だなあ

「ねえ」

立ち去ろうとした私を春奈先輩は呼び止めた。

「何でしょうか?」

私は振り返り、尋ねた。

「蓮と付き合つてるの?」

突然、そう尋ねられ戸惑う私

いきなり、何なんだ？

「何で、そんなこと聞くのですか？」

「興味があっただけよ」

「いったい、どんな興味があるの？」

「もしかしたら…春奈先輩も会長のことが好きなのかもしれない。」

「ってことは、両思いじゃん」

「付き合ってますん」

「私の片思いなんだよ…」

「そんなこと、春奈先輩にだけは尋ねられなくなかった。」

「そう。変なこと聞いてごめんね」

「春奈先輩は言った。」

「謝るのなら最初から、聞かなければいいじゃない。」

「私は心の中で文句を言って、中庭に向かった。」

### 第三章『告白』

分からない 何故、春奈先輩は私にあんなことを尋ねたのだろうか？  
春奈先輩は蓮会長のことをどう思ってるのだろう？

「す、好きです」

そんな声が聞こえてきたので私は戸惑った。  
いったい、誰が誰に告白しているんだ？

好奇心に誘われ、私は中庭の方を見る。

「会長のことが好きなんです」

蓮会長に告白している

「ごめん」

そう言つて会長はあっさりと断つてしまった。

結構、可愛い子なのに。スタイルだつて抜群だ。

「じゃあ、キスしてください。」

キスしてくれたら、もう二度と会長に近づきませんか」

えっ ！！キ、キス！！

なんて大胆なことを言つんだ。

「馬鹿なこと言つな」

「お願いします」

私はその場を離れようと思つても足が動いてくれない。  
見てはいけないんだ

でも、自分の好奇心には勝てない。

「いい加減しろ！！」

「嫌っ」

女の子はそう言つて、蓮会長に抱きついた。

私は見ていることしかできない。

会長は困つたような顔をしていた。

「俺はおまえの思っているような奴じゃない」

「でも…好き」



女の子は会長から離れようとしなかった。  
そんな彼女を会長は無理矢理突き飛ばした。

「本当に俺を怒らせたようだな？」

俺は優等生でもなんでもないんだよ！！

誰とも付き合わない、深く関わらない。

それが俺のモットーだ。

仲の良い友達なんていない、彼女なんていない。

おまえが好きだと言ったのは、俺の仮の姿だ。

本当の俺を知らないくせに。消えろ、うざい」

女の子は会長の言葉に涙を流しながら、駆け足でその場を後にした。  
会長が『消えろ、うざい！！』と発したことにびっくりした。

私は会長がそんなことを言うとは思ってなかった。

「おい、誰か居るのか？」

そう言つて、会長はこつちにやつて来る。

「あつ 星野。全部、聞いていたのか？」

「…はい」

「そうか」

会長はさびしい表情をした。

「私も会長が好きでした」

何を言っているんだ、私？それでも口が止まらない。

「でも、私もさっきの子と一緒にで

会長の仮の姿が好きだったのかもしれない。

あの女の子を傷付けるような言葉を、会長が言ったなんて信じられません。

だけど、そんな言葉を聞いた今でも、会長が好きなんです。  
嫌いになんてなれない」

そして、私は全力でその場から逃げた。

つに言ってしまった。

いずれかは告白しなければならないと、思っていた。  
でも、こんな形で告白したくは無かった。

私は会長の何を見てたのだろう？

会長は裏表がある人だったのか  
なんで、会長……。入学式の日に見せてくれたあの笑顔も仮の姿だ  
と言うのですか？

「おい、どうした？」

顔を上げると隼人が居た。

「好きな人に振られたんだよ……」

そう言った私の頭を隼人は撫でてくれた。

「そっか、そいつ見る目ないな」

そう言つて彼は私の隣に座った。

「私、綾乃みたく可愛くないし。仕方ないよ」

「おまえは、可愛いよ」

「えっ？」

隼人の口からそんな言葉が聞けるとは思つてなかった。

「おまえは俺が守つてやる。寂しかったら、いつでも俺を頼れ。」

俺はお前が好きだ」

顔が暑くなるのを感じた。

隼人、何言つてるの？冗談きついし（汗

「嘘じゃないよ」

隼人はそう言つて私を抱きしめた。

「ちっ」

二人の様子を影から見ていた蓮はおもわず舌打ちをした。

「星野、おまえには野村がぴったりだよ」

そう言つて、連は苦笑をした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1133a/>

---

憧れの彼

2010年10月21日23時41分発行